

東京外国語大学での世界史の授業実践

今泉 博

「大学生のための世界史」開講の背景

2014年11月、東京外国語大学(以下、外語大)の鈴木茂教授(ブラジル史。高大連携事業推進の中心の1人)から講座「世界史」開設の説明を受け、講師依頼を承諾した。鈴木先生が教養科目「世界史」導入を推進した背景を、ある大会報告①から要約する。外語大前期入試(入学者の約83%)の地歴科目は、14年度までの「世界史(近現代史)」必須が、15年度より「世界史」「日本史」からの1科目選択に変更される。すでに後期日程入学者のなかに「世界史」の学習が不十分な学生が散見された状態に、「日本史入学者」が加わることへの対応策の1つであった。

授業「大学生のための世界史」の実態

私が2015年4月～18年3月におこなった、「大学生のための世界史」の開講後の概要を述べる。授業(月曜日10:30～12:00)は、初めから想定外の展開であった。15年1月の提示用シラバスの作成に際し、受講対象生の学年確認を学務部におこなうと、回答は「全学生が受講できる講座です」であった。1年生、それも「日本史入学者」が中心であろうと考えていた構想は、大きな見直しをよぎなくされた。

つぎは開講教室の問題であった。初めに設定された教室の収容定員数から、大学側は春講座が150名程度、秋講座がその半数(入学生が多くが近現代史の世界史入学者であるため)であろうと、推測していたようであった。しかし、2015年の最

2015年度	春学期	260名(241名。300名収容可能の階段状ホール)
	秋学期	163名(142名。200名収容可能のすり鉢型大教室)
2016年度	春学期	452名(423名。500名収容可能の大ホール)
	秋学期	372名(347名。同上)
2017年度	春学期	416名(403名。同上)
	秋学期	262名(240名。同上)

図 受講者数と開講教室(括弧内は単位修得者数)

初の授業時に受講希望者が想定を大きく上まわった。授業実態をイメージしてもらうため、3年間の確定受講者、定期考査受検による単位修得者、および開講場所を、最初に示しておく(図)。

私の「授業」は、先生方がイメージする一般的な講義室でおこなう授業とは、まったく別のものであった。

シラバスと私の講義方針

2017年度のシラバスの概要

春学期・秋学期の2単位講座は、それぞれ13回の講義と2回の課題学習により、15回の授業で構成されている。ただし大学発表の学事暦では、13回の開講日が表示されているだけで、このなかで指定期日までに定期考査やレポート提出を実施して、成績評価をおこなうよう表記されていた。

使用テキスト・参考書

講座で使用するテキストと参考書として、以下の本を指定した。

テキスト
『市民のための世界史』（大阪大学出版会、2014年） ……大阪大学で教養課程の学生用に実践された「世界史」をもとに作成された。
参考書
『史料から考える 世界史20講』（岩波書店、2014年）
『名著で読む世界史120』（山川出版社、2016年）
『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』（ミネルヴァ書房、2016年）
『グローバル経済史入門』（岩波新書、岩波書店、2014年）
『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書、集英社、2014年）

『市民のための世界史』は、序章「なぜ世界史を学ぶのか」+第1章～第13章+終章「どのように世界史を学ぶか」からなっている。授業計画の各回は、おおむねテキストの第1章～第13章を前半部と後半部にわけて構成した（紙幅の点から、詳細については省略する）。

授業方針

- 春・秋講座の最初の授業で「世界史への導入」として、以下の(1)～(5)の方針として示した。
- (1)春学期と秋学期を通じて、高校の世界史Bに準拠するかたちで古代～現在までを講義する。
 - (2)世界史の時代ごとの構造を、大きな視点かつ新しい研究動向にもとづいて講義する。
 - (3)「日本史入学者」には、外語大入学後の学習に少しでも「橋渡しできる」ものとする。
 - (4)テキストの特色をいかして、「日本のことがほぼ出てこない世界史」を克服する。
 - (5)受講を通して、長い将来を生きていく学生のみなさんが、現在を少しでも論理的・実証的に理解できる能力＝情報リテラシーをやしなう、「反知性主義」におちいらないようにしてほしい。

「授業（講義）形態」と「授業展開」

TAの協力

毎年アルバイト大学院生が1名、TA（ティー

チング・アシスタント）としてついた。TAには、①授業用プリントと出欠用紙を兼ねるコメントシートの配布準備、②ホワイトボードと放送機材の準備、③終了時のコメントシート回収、④回収したコメントシートから受講者名簿への出席打ち込みなど、実務面で大いに助けてもらった。

授業（講義）形態

授業は、プロジェクターを使わず、3年間ホワイトボードを3枚セットして大きな文字で板書し、マイクを使って講義形態でおこなった。授業では毎回A4プリント3枚つづりを配布した。部数が多いため、1週間前にプリント室の職員の方に次回授業の原稿を渡して、印刷をお願いしておいた。授業用プリントは以下の方針にもとづいて作成した。

●授業用プリント作成の方針

- (1)内容面で3つのポイントを設け、読みやすく、関係性をつかみやすいものとする。
- (2)授業地域がどこであっても、日本史入学者も理解しやすいよう「同時代の日本」を付す。
- (3)日本史入学者対策を兼ねて、テキスト以外の著作からも適切な地図や図表を活用する。
- (4)興味・関心を深めてもらうため、歴史理論やいくつかの歴史事象に関連する著書を紹介する。

授業展開の諸例

2017年度春講座最大の修正は、12回目の授業でテキスト第7章の「イギリスとフランスの覇権争い」と「イギリスの工業化」を扱ったことである。前年度は秋講座第1回で扱った内容であるが、17年度は秋講座最後の授業計画から逆算して実施した。テキスト第13章は2011年の東日本大震災で終わっているが、世界ではその後、IS（イスラム国）の出現、ロシアのクリミア半島占領、16年のイギリスのEU離脱選択、アメリカでのトランプ現象が生まれていた。大転換期にある世界と、「内向き」

を強める日本の動きを考えてもらおうと、「グローバル化と反グローバル化」に関しては、

- ・ヴォルフガング＝シュトレーク『時間かせぎの資本主義——いつまで危機を先送りできるか』（みすず書房、2016年）
 - ・ダニ＝ロドリック『グローバリゼーション・パラドクス』（白水社、2014年）
 - ・ウィリアム＝ペセック『ジャパナイゼーション——日本の「失われた数十年」から、世界は何を学べるのか？』（作品社、2016年）
- の主旨を紹介し、課題を提示した。

受講生の学年別割合・授業評価・課題学習

春学期の定期考査前に実施されたアンケートでの学年別割合を示す。2015年の1年生128名は受講者260名の約49%、16年の1年生245名は受講者452名の約54%であった。なお日本史入学者は、15年が32名、16年が71名と、いずれの年も全体の15%前後であった。

受講者の反応をつかむため、初年度春講義の前半はコメントシートをもち帰り、書かれている疑問点や誤った理解について、つぎの授業の冒頭で解説をおこなった。しかし、コメントシートは出席確認用紙でもあるため、紛失の危険やTAの出席簿リストへの打ち込みの遅れにつながることから、後半からもち帰りをやめた。これは授業に対する反応をつかむ点からは、大変痛かった。

つぎに2016年の春学期定期考査時のアンケート提出者317名による「この授業の満足度」を示す。①「大変満足」67名、②「ほぼ満足」166名、③「やや期待外れ」62名、④「期待外れ」20名、⑤「その他」2名であり、①+②が233名と約74%であった。この数字をみた鈴木先生が、「今泉さん合格ラインですよ」といわれた。私は、授業に対する評価であると同時に、講座開設を進めた鈴木先生の自己の構想に対する評価でもあったと感じた。

課題学習の実施方法には、定期考査に対する日

本史入学者の大きな不安が関係していた。初年度の5月下旬、授業終了後に数名がうなだれて「定期考査は絶望です」といつてきた。鈴木先生からも、「地域研究」の授業で「まったく理解できません」という日本史入学者がいると聞いていた。私の講座で単位修得をあきらめた学生は、代わりの「橋渡しの役割」をどこに求めるのだろうかと考えた。対策として「テスト（定期試験）に関する告知」の配布を鈴木先生に相談したところ、「それを課題学習にすればよいのでは」とのアドバイスを受けた。その結果、課題学習(1)(2)として「テストに関する告知」を配布した。そこには、①日時・場所、②A4解答用紙の表裏(60罫)の論述、③テキスト・講義プリント・高校の世界史教科書などの持ち込み可、④4つのテーマと求める内容(受検者は1テーマを選択)、を示した。これを読む高校の先生方は③について「エッ」と驚くであろうが、既述の状況からくだした判断であった。

定期考査と成績評価

2017年春学期の定期考査の4テーマ

2017年春学期の定期考査では、以下の4テーマを事前に告知したうえ、出題した。

(1)「東アジア世界の代表的な国際関係と称される朝貢・冊封体制」について

①朝貢・冊封体制の定義、②紀元後1世紀～17世紀のうち、自分のよく知る時代および地域とのあいだの展開例を、具体的に述べよ。

(2)「多くの学生諸君が初めて学習したであろう中央ユーラシア型国家」について

①中央ユーラシア型国家の説明、②唐・宋時代と中央ユーラシア型国家との関係、または大モンゴル・ウルス(モンゴル帝国)時代の例を、具体的に述べよ。

(3)「16～17世紀のヨーロッパ人によるアメリカ大陸とアジアに対する進出」について

これによって生じた、①ヨーロッパと南北アメ

リカ大陸との関係、②ヨーロッパとアジアとの関係、③ヨーロッパ社会に生じた影響に関して、それぞれ具体的に述べよ。

(4)「17～18世紀の産業革命以前のイギリス」について

①重商主義国家に対する財政軍事国家という考え方、②イギリス商業革命とイギリス産業革命との関連を、具体的に述べよ。

受検生が選択・論述したテーマと人数は、(1)が177名(約44%)、(2)が38名(約8%)、(3)が154名(約38%)、(4)が38名(約9%)であった。課題学習のテーマ(1)を選んだヨーロッパ語系言語の学生が、予想以上に多かった。

成績評価の方法・基準

シラバスで「成績評価の方法は、学年末の試験またはレポートが70%、受講時の平常点が30%」、「成績評価の基準は、試験・レポート(70%)の内容に関して、選択テーマの2つの設問ごとに講義内容を十分に理解してあれば30%ずつ(上記テーマ(3)の場合は20%ずつの計60%)を、自主的に探究した内容には2つ合わせて最大10%までの評価を与える」と、記載した。なお論述方式のため、1日にできる採点はほぼ40名分であった。

外語大でも「成績評価への異議申し立て」制度がある。これは学生への成績開示後、「異議申し立て」のある学生が学務部に書類を提出し、そこから講師に通知される。私はある考査ののち2名から「異議申し立て」を受けた。1名にはコメントシートの内容分を加味して1ランク上げ、もう1名には理由を付して評価に変更なしと回答した。

授業をおこなった感想(課題も含め)

これを読んだ先生方も感じると思いますが、私自身、授業というより講演「大学生のための世界史」を3年間おこなった感覚であった。2015年秋講座のときだけ、受講生の顔をкаろうじて判別できた。私のおこなった「授業」は一般化できない例

である。日本史入学者が増えるなか、高校で「歴史総合」が開始された現在、外語大が講座「世界史」の位置づけを再考するのでは、と私は考えている。

①鈴木茂・今泉博「報告3:大学教養科目としての「世界史」の可能性と課題——東京外国語大学における2年間の実践報告」(「高大連携歴史教育研究会・第3回大会」、2017年7月29日)
(いまいずみ・ひろし/前東京都立国立高等学校教諭・前東京外国語大学非常勤講師)